

2017年度、男子校から共学校となった大阪府・私立高槻中学校・高槻高校は、新しい学校づくりに向けて、スクール・ポリシーを策定するとともに、それを指針として特色ある教育活動を拡充。生き生きと輝く生徒の姿は、同校入学希望者のロールモデルとなった。そうした状況は、教師にとっては教育活動を充実させる動機づけになり、学校の魅力化の好循環が生まれている。

推進し、14年度には、3コース制（図1）を導入しました。そうした中、共学化という学校の大きな変化に立ち向かうことは、教師一丸となって改革を進める強い動機づけになりました」

共学化後の生徒像を見据えて

スクール・ポリシーを策定。

3つのコースの特色化が、

新たな学校の魅力を築く

大阪府・私立 高槻中学校・高槻高校

共学化に向けて、
新たな学校づくりを推進

中高一貫の男子校として難関大学の合格者を多数輩出してきた大阪府・私立高槻中学校・高槻高校は、2014年度・16年度に行われた大阪医科大学・大阪薬科大学との法人合併を受け、女子学生の

比率が高い両大学との高大連携を円滑に図るため、共学化することを決定した。15年1月には、2年後の共学化に向けて、副校長、教

教育理念を具体化するもの
として3つのポリシーを策定

頭、各務務分掌の部長、共学校の勤務経験のある教師ら11人から成る「共学化特命プロジェクト」（以下、プロジェクト）を設置。当時の校長が、「今までの伝統と実績を引き継ぐだけではなく、『最優の進学校』を目指して、学校を一から設計しよう」と宣言し、新たな学校づくりが始まった。プロジェクトリーダーを務めた、前田秀樹教頭は、次のように語る。「当時の本校は、学校改革の真っただ中で、12年度に制定したスクール・ミッション『Developing Future Leaders With A Global Mindset』（*1）の下、英語教育改革と、国際教育・探究型教育を

プロジェクトで新たな学校像を議論する中で、スクール・ミッションに掲げた次世代のリーダー像を具体化するため、育成を目指す資質・能力を策定することを決めた。加えて、大学で策定が一般化していたディプロマ・カリキュラム・アドミッションの3つのポリシーを自校で策定することを、前田教頭は提案した。「一から学校づくりを行うとしても、教育理念は伝統として根づいている不変的なものです。そこで、3つのポリシーという切り口で教育理念を具体化するのであれば、校内の賛同を得られやすいのではないかと考えました」前田教頭はプロジェクトメン

*1 日本語では、「卓越した語学力や国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる次世代のリーダーを育成する」となる。

学校概要
 設立 1940（昭和15）年
 形態 全日制／普通科／共学
 生徒数 1学年約270人
 2021年度入試合格実績（現浪計） 国立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、九州大などに166人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、大阪医科薬科大などに延べ581人が合格。



SSH推進部 奥野直人
 おくの・なおと
 教職歴15年。同校に赴任して7年目。理科（生物）。



SGH推進部 重見高徳
 しげみ・たかのり
 教職歴16年。同校に赴任して4年目。社会科（公民）。



進路指導部部长 田中大祐
 たなか・だいすけ
 教職歴20年。同校に赴任して17年目。理科（物理、地学）。



主幹教諭、研究開発本部 林徹治
 はやし・てつはる
 教職歴14年。同校に赴任して8年目。数学科。



教頭 前田秀樹
 まえだ・ひでき
 教職歴26年。同校に赴任して22年目。

図1 3つのコース

GL (グローバル・リーダー) コース

英語運用能力を備え、グローバルマインドセットを持つ次世代リーダーを育成する。クリティカルシンキングなど、知識を「使う」技術や考え方を身につけ、自身の問題意識を基にした探究学習に取り組む。

GS (グローバル・サイエンス) コース

データサイエンスの素養を持ち、グローバルマインドセットを備えた生命科学系リーダーを育成する。SSH事業を中心とし、世界を視野にした探究学習を、同一法人の大阪医科薬科大学や他大学と連携して取り組む。

GA (グローバル・アドバンス) コース

グローバルヘルス向上の視点を持って国際的な諸課題に創造的に挑戦する次世代リーダーを育成する。2020年度までの5年間、SGH指定校として蓄積してきた実績を基に、文系・理系の枠を超えて、問題解決型学習に取り組む。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 スクール・ポリシーの策定にあたっての枠組み

下記のAはアドミッション・ポリシー、Bはカリキュラム・ポリシー、Cはディプロマ・ポリシーにつながるとして、A～Cにあてはまる言葉を考えながら、スクール・ポリシーを策定した。

本校は、**A** こうした生徒に、
 中高6年間で、**B** のような教育を施し、
 卒業時には **C** こうした力をつけて、次のステップに送り出します。

※学校資料を基に編集部で作成。

スクール・ポリシーは、教育活動を検討する際、よりどころとなり、3つのコースの特色を際立たせることにつながっている。

同校は、中学2年次までは全生徒がGLコースに所属して、グローバルリーダーに必要な価値観や基礎学力を養い、中学3年次からは生徒の希望に応じて、GS・GAを加えた3つのいずれかのコースに所属する。GLコースは幅広く将来を考えたい生徒向けで、GSコースはSSH（*2）、GAコースはSGH（*3）を軸に教育活動を展開する。SSH推

スクール・ポリシーを軸に3コースの特色を鮮明化

バーに、3つのポリシーを、「本校でどんな生徒を、どういった教育活動で、どのような人材に育てて卒業させたいか」といった枠組みで考えようと提案（図2）。それを基にメンバーが考えた意見をもち寄って議論を進めた。共学校の勤務経験者としてプロジェクトメンバーとなった林徹治先生は、

次のように振り返る。「ポリシーという耳慣れない言葉に戸惑いましたが、示された枠組みは、本校が行っている教育を言語化するものでしたので、とても考えやすかったです。当時赴任1年目だった私にとって、プロジェクトでの議論は、本校の教育理念を深く理解する機会にもなり

ました」

議論の内容は職員会議で報告し、そこで出された意見についてもプロジェクトで検討し、全校の理解を得ながら形にしていた。そして、10回の議論を経て、15年5月、「3つの方針（スクール・ポリシー）」「育てたい『10の資質』」を策定した（P.16 図3）。

*2 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。同校は、2014年度から指定を受け、現在2期目。 *3 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」。同校は、2015年度にSGHアソシエイト、2016年度からSGHの指定を受け、事業終了後の現在は、SGHネットワークの参加校。

図3 建学の精神、スクール・ミッション、スクール・ポリシー

- **建学の精神** 国家・社会を担う人物の育成
- **スクール・ミッション** Developing Future Leaders With A Global Mindset
- **アドミッション・ポリシー** [求める生徒像]
 - 1 本校の使命や教育方針を理解する生徒
 - 2 学力が優秀で知的好奇心が豊かな生徒
 - 3 自分で考え、積極的に行動できる生徒
 - 4 人間尊重の精神*を持ち、社会貢献の意識が高い生徒

*人間尊重の精神……生命の尊重、人格の尊重、人権の尊重、人間愛などの精神

● **カリキュラム・ポリシー** [教育の方針]
 確かな学力・豊かな人間性・健やかな心身の育成と、変化する社会に積極的に対応し得る能力・意欲・創造性を養うことを教育方針とし、その実現のために以下の教育を行います。

- 1 6年一貫教育のメリットを生かしたカリキュラムを編成し、高い学力が確かに身につく指導を行います。
- 2 次代を担う人物に求められる力は何かを常に考慮し、最高水準を追求した教育活動を展開します。
- 3 規律ある学校生活を通して、自らを律して行動する力や規範意識、高い倫理観を育みます。
- 4 コミュニケーション力やリーダーシップ、レジリエンス（しなやかな強さ）を身につけ、さらに生涯にわたって健やかな生活を送るための体力を育成します。
- 5 国際教育に積極的に取り組み、卓越した語学力とグローバルマインドセットを養うために様々な教育プログラムを提供します。
- 6 学びを支えるリテラシーや批判的思考力、プレゼンテーション力、自己管理能力を育成し、生徒自らが課題を発見し解決する意欲と能力を育むため探究型の教育を行います。
- 7 学校行事や課外活動、高大連携講座、ボランティア活動などを通して視野を拡げ、主体性と協働意識、他者尊重と社会貢献の精神を涵養します。

● **ディプロマ・ポリシー** [卒業時に身につける力・卒業認定]
 幅広い知識と高い学力、課題解決力を身につけ、国内外のトップレベルの大学に進学し、国際的視野を持って主体的に自らの進路や社会の未来を切り拓く力と豊かな人間性を備えた多様な人物の輩出を目指します。

● 育てたい「10の資質」

- | | | | |
|-------------|------------------------|----------------------------|--------------|
| ● 個人的能力や思考 | ● 全体を見渡して判断し、主体的に行動する力 | ● 論理的に思考し、日本語および英語で表現する力 | ● 自己管理能力 |
| ● 他者との関係 | ● 創造性（知識や情報を発展的に活用する力） | ● 多様な他者を理解し思いやる力 | ● コミュニケーション力 |
| ● 社会や文化との関係 | ● コラボレーション力（チームワーク） | ● 国際社会の持続的発展や平和に貢献しようとする意志 | ● 倫理観 |
| | ● 日本の伝統・文化を尊重する心 | | |

同校では、上記のほかにも、校訓、教育理念、教育スローガン、目指すリーダー像を設定。それらはすべて同校のウェブサイトにて公開している。 ※学校資料を基に編集部で作成。

進部の奥野直人先生は、教育活動はすべてスクール・ポリシーに結びつけて構築していると説明する。「Gコースの場合、SSHの趣旨に沿って、理系人材の育成の視点で探究学習や高大連携などを取り入れ、スクール・ポリシーを踏まえて、生徒主体で他者との協

働などができるような活動内容を工夫しています。その学校で何が学べるかを示すカリキュラムは、生徒が学校の魅力を判断する重要な要素であり、カリキュラム・ポリシーは学校の魅力化の鍵を握るものと考えています」
 GLコースは、SSH・SGHという対外的に分かりやすい魅力

の間に埋もれないよう、教育活動を構築している。例えば、同校への入学希望者を対象としたイベントを生徒が企画・運営する「オーブンキャンパス・プロジェクト」(図4)や、自分たちの遠足を企画・提案し、採用された案が実施される旅行会社でのインターンシップなど、生徒が自ら課題を発見し、

「パラオの肥満問題に取り組んだ生徒は、現地調査ができなくなったため、連携先の大学教員に相談し、オンラインで現地の人たちにインタビューをして研究を続け、身体活動を向上させるカードゲームを考案しました。インターン前には、大学教員から質問項目のチェックを受けるなど、一

考えた企画を実践する場を、スクール・ポリシーに照らし合わせて設けている。GLコース担当の田中大祐先生は、次のように語る。「最後に実践の場がある活動は、どんなに大変でも形にするという責任が伴いますが、だからこそ、生徒は真剣に取り組み、他者と協働し、創造性を発揮していきます。それが、自分の思いを実現できるといった本コースの大きな魅力になっています」

SGHがカリキュラムの軸となるGAコースでは、特色である海外連携がコロナ禍において制限されている。それでも、外部人材などのリソースを活用し、探究学習を継続させていると、SGHN推進部の重見高徳先生は説明する。

図 4 特色ある教育活動の一例

活動名	活動内容
オープンキャンパス・プロジェクト	GLコースの高校1年生が、同校入学希望の小学5年生とその保護者を対象としたイベントを企画・運営。当日行う学校説明やワークショップ、会場の設営や来場者の誘導など、すべてを生徒が行う。
学修インタビュー	年度末に、生徒は自身の1年間を振り返ってまとめ、どんな思いで、何を学び、どのように成長したのかについて、担任・保護者にプレゼンテーションする。中学1年次から生徒全員が行う。

※学校資料を基に編集部で作成。

線で活躍する研究者の指導を受けられるのは、本コースの大きな魅力の1つです。特色づくりには、自校のリソースをうまく活用することが重要だと感じています」

スクール・ポリシーで活動の意味づけが容易に

スクール・ポリシーがあることで、新たな教育活動への挑戦も

やすくなった。同校の代表的な取り組みの1つである「学修インタビュー」(図4)は、カリキュラム・

ポリシーにプレゼンテーション力を育成する教育が掲げられていることを根拠として導入した。

「大学入試直前に面接練習をするだけでは、プレゼンテーション力を育成しているとは言えず、生徒が中学1年次から定期的にプレゼンテーションする場が必要だと説明すると、校内の賛同を得られました」(前田教頭)

また、この5年間で全教師の約3割が入れ替わったが、スクール・ポリシーがあることで、新しく赴任した教師と指導方針を共有することが容易になった。6年前、スクール・ポリシー策定後に赴任した奥野先生は、自身の体験を次のように振り返る。

「特別活動の企画書には、スクール・ポリシーを踏まえて立てられた活動の目標が必ず明記されています。それを目にする機会を積み重ねることによって、本校で求められる指導を常に意識することができるようになったと思います」

目の前の生徒が輝くことが魅力ある学校であり続ける鍵

21年度で共学化5年目を迎えた同校の新たな学校づくりは、軌道に乗り始めている。その成果として、S HやS G Hで探究学習を突き詰めた生徒が全国大会で入賞したり、国際政治学者を目指す生徒が、ほかの生徒にも国際政治に関心を持ってほしいと、校長に大使経験者を招いた講演会を提案し、それを実現させたりと、生徒一人ひとりがそれぞれの輝きを放っている。「学校が活性化し、勢いを感じています」と、前田教頭は言う。

「オープンキャンパスなどでは、在校生と本校入学希望者が直接触れ合う機会を設けています。在校生に憧れて入学した生徒が、本校で活躍して憧れられる側となるという好循環が生まれ始めました。教師も、活躍する生徒の姿に、教育活動を一層充実させようという意欲的です。今本校に通う生徒が生き生きと活動して輝くことが、魅力的な学校を持続可能なものにする

のだと実感しています」

同校は、アドミッション・ポリシーに応じて入試問題を見直し、「自分で考える」力を評価するため、国語・算数で記述式問題を増やした。

「自分で考えて行動する生徒が増えていると感じます。以前は本校入学後に学力が伸び悩む傾向がありました。今は、入学後に生徒が伸びる学校という評価を、保護者からいただくようになりました」(林先生)

22年度、共学校1期生が卒業を迎える。それを一区切りとしてこれまでの成果と課題を整理し、スクール・ポリシーの点検や見直しを行う予定だ。

「スクール・ポリシーの策定後、情報化やグローバル化が一層進み、STEAM教育(*4)の重要性も高まっています。自校の課題とともに、社会の変化に応じた視点でも、本校が目指す学校像を検証し、その結果をスクール・ポリシーにも反映させていきたいと考えています」(前田教頭)

* 4 Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics の頭文字で、科学・技術・工学・芸術を始めとする文化的教養と数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。